



世界でたった一つの個性

発達障害の早期発見、早期療育を目指す

浜松市内に住む小学3年生のある男の子。記憶力が抜群で、算数や漢字など答えのはっきりとした勉強は大の得意です。しかし、何事も「完璧」でないと気が

すまず、集団の人間関係が苦手。運動会の練習に最初は怖くて参加できず、1週間、2週間とみんなの練習をじっと観察し続けました。そして、自分の頭の中で何度もシミュレーションし、家でこっそり練習した結果、「できる」と判断すると、ようやくみんなと一緒に練習する

ようになったのでした。いかがでしょう。ご自身の子どもの時代を振り返って「そういえば、クラスにこんなタイプの子がいたなあ」と思い出しませんか？実はこの少年、「アスペルガー症候群」という障がいのある子ども。知能に遅れはありませんが、コミュニケーション

や対人関係などが苦手で、興味や関心に偏りがあります。ちなみに天才科学者として有名な、あのアインシュタインも「アスペルガー症候群」だったと言われています。
「アスペルガー症候群は、いわゆる『発達障害』の一種。発達障害には、このほかに自閉症、物事に集中できない注意欠陥多動性障害(AD/HD)、読み書き・計算などが苦手な学習障害(LD)などがあります。こうした障がいは決して特殊なものではなく、誰にでも起こりうることで。最新の統計によると、新生児の6%くらいは発達障害があるか、その疑いがあると考えられています。そう語るのは浜松市発達相談支援センター「ルピロ」の内山敏・副主幹(臨床心理士)です。

「ルピロ」は発達障害のある人やその家族をサポートするため、今年6月にオープンした施設。浜松市保健所(中区鴨江二丁目)隣の建物に事務所を置き、現在、精神科医1、臨床心理士2、社会福祉士1、保健師1の合計5人体制で発達障害への支援活動を行っています。

「ルピロ」の支援はあらゆる年代の人を対象としていますが、浜松市が特に力を入れているのは「早期発見、早期療育」へ

の取り組みです。発達障害は早期に見し、早期に対応するほど就学前の負担などが軽くなります。1歳半健診などで「少し気になるかな？」という結果が出たら、ぜひ気軽に相談してほしいと思います(内山副主幹)。

専門教室や人員の不足が大きな課題

ところで、「ルピロ」の支援活動とは具体的にどのようなものなのでしょうか。「ルピロ」所長で、浜松市社会福祉事業団発達医療総合福祉センターのセンター長も務める山崎知克さん(精神科医)は、次のように語ります。

「ルピロ内で電話予約による相談を受け付けているほか、市内各区の学校、幼稚園、保育所などをスタッフが巡回訪問し、現場の教育ニーズに対応しています。また、市が運営する『発達支援広場』にスタッフを派遣することも重要な業務。この広場は、保健所内の母子保健センター、東部保健福祉センター(南区青屋町)の2カ所で週1回ずつ開かれ、療育の考え方のもとに運営されています。言葉の遅れや落ち着きのなさなど、子どもの発達を心配する親子が参加します。親子遊びを中心に親同士の話し合いや、専門家の相談により、子どもが伸びていく経験を持つための場なんです」

このほか、「ルピロ」では保健師や教育関係者などを対象とする研修会を開き、毎回、多くの参加者を集めています。特

に今年7月、アクトのコンGRESセンターで開かれた「ルピロ」開所記念講演会には520人も聴衆が詰めかけ、立ち見も出るほどの盛況でした。「それだけ、発達障害にかかわる人たちのニーズがあったのかと、非常に驚きました」と山崎さんは振り返っています。
一方、「ルピロ」の活動だけでなく、発達障がいのある子どもと親などで構成する民間団体も活発に動いています。その団体の名前は「アクティブ」。代表の門野倍美さんは次のように語ります。
「アクティブは平成15年の発足以来、発達障害のための特別支援学級を地域に増やす活動を行ってきました。発達障がいのある子どもには、甘やかしてはいけません。育てていく必要があります。また、わたしたちは発達障がいのある子どもたちのエピソード集『ふしぎわ〜ると』(1、2)を発刊しています。この冊子を通じて、子どもたちのユニークな個性を好きになつてもらいたいですね」。この記事の冒頭で紹介したエピソードは「ふしぎわ〜ると2」から引用したものです。
こうした民間、行政の積極的な取り組みにより、発達障害への地域の理解は徐々に深まりつつあります。しかし、現状は決して十分なものではありません。最大の問題は、発達障がいのある就学前の子どもを療育する専門の教室が少な

いことです。「現在、市内の主な専門教室は浜松市根洗学園(北区根洗町)と、はままつ友愛のさと(浜北区高園)など数少なく、合計の定員は100人不足で、年間ニーズの4分の1程度にしか対応できません。また、教室が地域的に偏っているのも大きな問題(内山副主幹)。さらに、支援の要である「ルピロ」の人員がわずか5人では、やはり限界があると言えるでしょう。
さまざまな課題を抱えつつ、発達障害の「早期発見・早期療育」に向けた浜松市の挑戦は、これからも続きます。



「ルピロ」内で、発達障害の相談を受ける内山副主幹(左)

「ルピロ」に置かれている各種パンフレット

